

第 21 回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2021 年 2 月 17 日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。

10:00 から 12:00 までの予定で、文部科学省省議室で行われた。

今回も前回に引き続きコロナウイルス感染拡大防止で傍聴者は認められず、ライブ配信での中継となった。140 人前後が視聴していた。

今回の議題は以下の通りである。

1. 「ウィズコロナ・ポストコロナ時代の入試のあり方」について

今回も前回に引き続き WEB 会議方式で行われ、文科省の会議室からは三島座長と川嶋委員が、その他の委員はネットを経由して参加した。事務局からは渡部委員、荒瀬委員が欠席であり、萩原委員、吉田委員は途中退席の予定であることが告げられた。萩生田大臣は 11:15 頃から会議の最後まで参加していた。

まず、最初に大学入試センターの山本理事長より、令和 3 年度の大学入学共通テストの実施結果概要（資料 1-1）および大学入試センターにおける CBT の検討状況（資料 1-2）について報告があった。

共通テストはこれまでと異なる状況下で、本試験 2 回と特例追試という形式で行われたが、無事に実施することができた。受験者数などの確定値は明日公表予定である。また、今後は外部および内部における評価が実施され、その結果は 6~7 月頃に公表予定となっている。

CBT については IRT を想定した課題等が検討されており、検討部会による報告書が 3 月に公表される予定である。

次に 10:30 頃より、事務局から参考資料 3「大学入学者選抜における英語 4 技能評価及び記述式問題の実態調査の結果」、参考資料 4「総合的な英語力の育成・評価が求められる背景について」に基づいて説明が行われた。

実態調査の結果について新たに集計されたデータとして、学部ごとの一般入試の割合や、一般入試における試験科目の出題状況が示された。一般入試の割合は理・医・歯系で多いこと、商・経済で数学を必須とする割合や医・農学系で生物を必須とする割合が少ないことなどがデータとして示された。

参考資料 4 では、英語が世界で重要視される中、日本の英語力が低いこと、企業でもグローバル化が進み、入試科目としても英語が多いという状況についてデータが示された。また、大学生の英語力についても、1 年次は上昇するが 2~4 年次には元に戻るというデータも示された。

11:00 頃より、議題 1 について資料 2 に基づいて川嶋委員より説明があった。ウィズコロナ・ポストコロナ時代の大学入試のあり方について、項目建てとして以下のような(1)～(5)があり、議論すべきテーマが示された。

- (1) 令和 6 年度実施の入学者選抜に向けて
- (2) 入学時期・修学年限の多様化に対応した入学者選抜のあり方
秋入学など
- (3) 大学入学者選抜におけるデジタル化の推進
GBT、電子出願、オンライン面接など
- (4) 総合型・学校推薦型選抜のあり方
- (5) 大学入学者選抜の実施検討体制
高校・大学等関係者間の協議体の設置など

委員の意見の概要は以下の通りである。

益戸委員：企業において英語力の育成はとても重要であり、英語ができなければ若者の将来が狭められてしまう。英語か日本語かではなくどちらも大事であり、また英語の学習を通して異文化と接する態度も養われる。協議体の設置は大賛成であり、時代に即した形の議論が必要である。予算や資金計画についてもその議論のテーマに入れてもらいたい。5～10 年後を見据えた議論をしてほしい。

末富委員：共通テストにおける高校会場の実態や宿泊が必要な生徒がどの程度いるのか把握すべき。今年度の共通テスト実施結果の検証については、その総括を会議に報告してもらいたい。GBT について自己目的化の懸念があり、同じ失敗を繰り返さないように適切な政策のマネジメントが必要である。高校と大学の接続は、入試だけではなくカリキュラムなど他のつながりも考慮すべき。

芝井委員：今年度の共通テスト実施体制は来年も継続されるのか、元に戻るのか。英語に関する資料については、英語帝国主義助長する内容であると思う。なぜ英語を学習させるのか議論するべきで、全員に押し付けるのは暴論である。

→(山本委員)今年、本試験を 2 回やったのは特殊な状況であった。この実施方式が来年度以降も続くというわけではないが、来年度については今後の状況を見ながら検討したい。

吉田委員：今年度は二次試験を中止する大学があり、本当にこれでよかったのか検討すべき。GBT についても何を GBT 化するのか考えなくてはならない。なぜ英語なのかと今更言ってもしょうがない。小学校からすでに義務化されており、他の言語を学ぶ余裕はない。大学がポリシーにしたがってどのような入試をやるのか、学生中心に考えてほしい。

柴田委員：秋入学と春入学の関係性など、現状でのスケジュールを含めて改めて見直す必要がある。協議体については必要だと考えており、検討する機会があるとよい。現状の入試においては「10 日前ルール」というものがあり、制約となっている。医学部で生物

を入試科目に課していないとの指摘があったが、生物を学ぶには化学と物理の知識が必要であり、大学で生物を学ぶために入学時に化学と物理の知識習得を求めている。

島田委員： 今回の共通テストで出題方針、意図の実現状況についてはある程度の実現に留まったと考える。これは円滑な移行を目指したためであり、大きく混乱させることがなくてよかった。今後も少しずつ改善を続け、意図の実現を目指してもらいたい。不十分だった点としては、国語に出題するとされた「実用的な文章」がどのようなものであるのかが受験生に対して明示的でなく、しっかりと明示するべき。また、オンライン化について今年度の状況を調べて公表してもらいたい。

両角委員： 今年だけがコロナで特殊だったとは思っていない。今後もこのような状況を念頭においた検討が不可欠である。エビデンスに基づく検討も必要であるが、合わせて個別大学における分析も必要である。入試が複雑になりすぎている原因の一つとして定員の縛りがあり、これを緩やかに考えることでよい入試になっていくのではないか。

岡委員： 共通テストはとてもよくできていたと思う。今後のCBT化については国大協としても協力していきたいと考えているが、国の支援が必要だとしっかり書くべき。秋入学については授業を2回やらなくてはならないこともあり、社会との話し合いが必要。

萩原委員： 今回の入試においては、大学の柔軟な対応に感謝している。今後も引き続き考えてもらいたい。協議体については必要であると考えており、短期的なことだけではなく、中・長期的課題も検討してはどうか。

清水委員： オンライン入試については、現状を把握するとともに長いスパンでどうするかガイドラインが必要であると考え。CBTについても、リスニングが現在の完成形になるまでに長くかかったようにすぐにはうまくいかないのが、リアリティーを見ながら慎重に進めるべき。

斎木委員： CBTの活用可能性を検討するために、内外の事例を共有したい。出願の電子化には賛成であり、オンライン面接も推進すべき。高校会場についても実態把握の上検討する必要がある。英語については、すべからず総合的英語力を育成すべきと考える。

小林委員： CBTは医学系の学部内で既に実施されており、有効だと思うので活用してほしい。オンライン面接については、回線の問題でうまく実施できなかった例もある。英語については、英語の成績がその後の専門科目の成績と大きく関わっており、重要な科目であると考え。国家試験に英語が入れば、もっとやる気になるのではないか。

最後に、萩生田大臣より挨拶があった。

今回は特殊な状況下ではあったが、来年も日常に戻れるかわからない。今回限りとせずそのよさを残して来年について考えていきたい。個別入試についても柔軟な対応があったが、大学がきちんと考えたのか、もうひと手間かけることはできなかったのか問いたい。定数を埋めることが優先されているのではないか。CBTなどデジタル化についてもスモールステップで検証しながら進めていきたい。小中学校においては少人数学級やGIGAスク

ール構想など様々に改革しているが、同時に教員養成の見直しが必要だと考えており、専科の教員を増やしていきたい。

次回の第 22 回会議は 3 月 4 日（木）に開催予定であり、時間については決まり次第連絡することとなった。